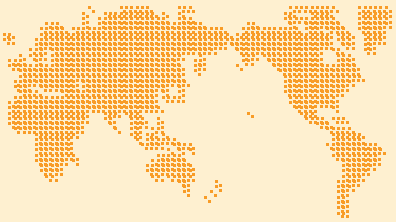
WORLD REPORT

海外レポート

現地から旬の情報をお届けする



Part 1

荏原ブラジル50年の歩み

Ebara Bombas América do Sul Ltda.
神谷 泰佑 / 足立 レナト 憲昭

1．はじめに

当社グループのブラジル法人 Ebara Bombas América do Sul Ltda.（以下、EBAS社）は、2025年にブラジル進出50周年という節目を迎えました。本稿では、当社グループがブラジルへ進出するに至った経緯、ブラジル市場の特徴、EBAS社の事業概要を交えながら、この50年の軌跡を紹介します。

2．創業者の熱意から始まったブラジル進出

当社グループのブラジル進出の構想は戦後に始まったものではなく、1941年に創業者･畠山一清（以下:一清）が現地拠点の設立を試みたことに端を発します。しかし、第二次世界大戦の影響により計画は断念せざるを得ず、終戦後も国交断絶がしばらく続いたため、一清 の生前にブラジル進出を果たすことはできませんでした。

その後、一清 の意思を受け継いで国交回復後にブラジル進出を再計画し、1975年に当社グループ初の海外製造拠点Ebara Industrias Mecânicas e Comercio Ltda.（EIMCO社）を設立しました。設立後は深井戸ポンプの製造・販売・アフターサービスを軸に事業を拡大し、2015年にはブラジルの老舗ポンプメーカThebe社を買収して陸上ポンプ製品群を強化。2018年の事業統合を経て現在の EBAS社となりました。

3．農業大国、ブラジルの市場

ブラジルは南米最大の経済国であると同時に、世界有数の農業大国でもあります。ブラジルでは日本と異なり治水技術は十分に発達していない代わりに先端テクノロジーを活用した「産業農業」が発展しています。

特に、広大な土地を活かしたセンターピボット（回転式灌漑装置）が数百メートル規模の円形を描きながらスプリンクラーで給水を行う光景は圧巻です。EBAS社の深井戸ポンプや陸上ポンプは、このような農業設備の「心臓部」として作物に水を供給しています。

灌漑給水に使用されている高効率ポンプGS型

農場内の「ため池」から取水し、ポンプを用いて灌漑装置へ給水

センターピボット

ピボット灌漑給水の様子。スプリンクラーから水を散布する。

4．ブラジル国内で活躍する荏原のソーラーポンプ

ブラジルは日本の約23倍の面積を持つ一方、電力が行き届かない地域も少なくありません。そのためポンプを使用できず、水源から遠い場所では農地活用が進まない、または、天候によって収穫量が安定しないといった課題があります。

この課題に対し、当社ではソーラーパネルとポンプを組み合わせたシステムを提供することで、無電地域での農地活用、引いてはブラジル全体の農業生産性向上に寄与しています。

特に大規模農場では、何百枚ものパネルを敷き詰めた「メガソーラー」が設置され、大型ポンプの動力源として活用される事例も見られます。これは、広大な国土を持つブラジルだからこそ実現できるダイナミックな技術活用といえます。

5．ブラジル進出100年企業を目指して

EBAS社は、南米でのプレゼンスをさらに高めるために、2024年にウルグアイのAsanvil社を、2026年１月に消火装置などの設計組立を行うGermek社を買収しました。

創業者が描いた構想から、戦後の再出発、現地企業の買収・統合など、数世代にわたりバトンを受け継ぎ、EBAS社はブラジル進出50周年を迎えることができました。

今後もEBAS社は、創業の精神である「熱と誠」をもって社会へ貢献し、ブラジル進出100年を目指してまいります。

ソーラーポンプ Écaros

円形状に緑の濃いエリアが灌漑エリアで、その周りが非灌漑エリア。灌漑状況によって生育に大きな違いが生まれる。

コラム 遠くて近い国、ブラジル。～世界最大の日系社会～

「パン」や「カステラ」といった、今では日本でも当たり前に使われている言葉。これらの言葉は室町時代にポルトガルから日本へ伝わりました。かつてポルトガル領であったブラジルの公用語はポルトガル語のため、遠く離れた国でありながら、日本人にとって聞き馴染みのある言葉が随所に見られます。

そんなブラジルですが、実は世界最大の日系社会があることはあまり知られていません。1908年、日本政府のブラジル移民政策により多くの日本人が渡伯し、現在では推定250万人を超える日系人が暮らしています。特に、日系コミュニティが集まって毎年開催される「日本祭り(Festival do Japão)」では推定18万人を超える来場者を記録し、日系社会の大きさを実感できます。

南米最大の日本人街リベルダーデ。
土日は常ににぎわい、この日は七夕祭り。

このように現在では大規模な日系社会が形成されていますが、移民人口が少なかった1900年代には大変な苦労とサウダージ(故郷を想い懐かしむ心情)を抱えていたであろうことは想像に難くありません。一清 が世界に先駆けてブラジル進出を志した背景には、遠くブラジルに住む日本人を支えたいという思いもあったのかもしれません。

日本祭りの太鼓音頭。日本の文化が広く受け入れられている。

コスプレ大会の様子。ブラジルでも人気のチェンソーマン。

ブラジル最大の経済都市、サンパウロ。アマゾン地域とは対照的に高層ビルが立ち並ぶ。